西三条第跡出土の遺物 1

銭貨・金属製品・石製品

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

銭貨（実物大）

毛抜　右は頭部側面の拡大写真（長さ 11.1cm）

銅鏃（長さ 5.2cm）

はじめに　「西三条第」は平安時代前期に右大臣を務めた藤原良相（ふじわらのよしみ）の邸宅です。2011年の調査で検出した池から「三条院釣殿高坏」と墨書した土器が出土したことから、平安京右京三条一坊六町の邸宅が西三条第であることがほぼ確実となりました。またこの池からは、土器・陶磁器類、銭貨、金属製品、石製品、木製品、土製品など大量の遺物が見つかりました。

これらは9世紀中頃から末葉にかけての高級貴族の暮らしがみえる具体的な資料として、質・量ともに大変重要な発見でした。今回から数回に分けて出土した遺物を紹介します。

銭貨　奈良・平安時代に日本で鋳造された12種類の銭貨は皇朝十二銭（こうちょうじゅうにせん）と呼ばれます。このうち池からは3種類が出土しています。初鋳された順では、長年大寶（848年）2枚、饒益神寶（こうちょうしんぽう）（859年）1枚、貞観永寶（870年）4枚です。また、隆平永寶（796年）は池の下面で見つかった井戸から、承和昌寶（835年）は池の外から出土しています。しかし、寛平大寶（890年）以降に鋳造された銭貨は出土していません。このように、銭貨の出土は、池が埋没していく年代を推定する上で参考になりました。

毛抜（けぬき）　金銅製で、丸く曲げられ

火箸（長さ 28.5cm）

鉄鏃（長さ 16.5cm）

刀子（長さ 14cm）

た頭部の側面には膨らみがあり、羽状の文様が毛彫りされています。金メッキも部分的に残っています。

銅鏃　小型品でありながら作りは精巧です。刃先の断面は菱形で、鋭利です。樋とよばれる溝も彫られています。ミニチュア製品のように見えますが、用途はよくわかりません。

鉄鏃　先端は鑿の形をしており、身と茎の境には突起があります。藤原良相は承和6年（839）左兵衛小将に任じられると、「承和の変」（842年）では恒貞皇太子の居所を囲んだことが『続日本紀』に記述されているため、関連性が注目されます。

刀子　茎が長く、約半分を占めます。刃の先端は薄く鋭利です。木簡に文字を書く場合、絶えず木材を削る必要があったため、官吏にとって刀子は必需品でした。

火箸　下半部は断面が方形ですが、柄の部分はねじりが加えられ、頭には輪が作られています。装飾性が高く、平安時代の出土品としては珍しいものです。

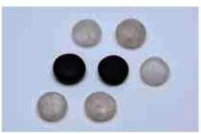
石製帯飾り具　官服の帯に付ける石製の飾りです。帯飾りの蛇尾と巡方が出土しており、巡方の裏面には銀・銅の切金が残っていました。琥珀製（写真右下）は邸宅の建物からの出土で、貴重品です。

軸端　経典など巻物の両端に差し込むものです。透明な水晶が円柱状に加工されています。頭部は丸く、反対側は平で、黒い汚れが付着しています。こちらを軸に差し込んでいたのでしょう。

碁石　黒石と白石が揃っています。黒石は那智黒です。白石は水晶ですが、軸端と異なって白濁した水晶が選ばれています。白色を意識したのでしょう。

このほかにも、金属製品では、頭を折り曲げた釘や、頭に円板を貼り付けた鋲が多数見つかっています。石製品では滑石製の風字硯と、刀子を研ぐのに使う砥石などが出土しました。　（丸川義広）

石帯　左が表面、右が裏面（左端の巡方の一辺 4.3cm）



碁石（直径約 1.6cm）

軸端（長さ 2.7cm）